

教育実習の事前指導に関する指導プログラムの検討と課題

Examination and problem of the instruction program about prior instruction of teaching practices

青木香保里、荒井眞一¹、志村結美²、日景弥生³

愛知教育大学教育学部家政教育講座、札幌大谷大学社会学部¹、山梨大学大学院総合研究部²、弘前大学教育学部³

Kahori AOKI, Shin-ichi ARAI¹, Yumi SHIMURA², Yayoi HIKAGE³

Department of Home Economics Education, Faculty of Education, Aichi University of Education, Kariya, 448-8542, Japan

¹ Faculty of Sociology, Sapporo Otani University, Sapporo, 065-8567, Japan

² Faculty of Education, Graduate School, University of Yamanashi, Kofu, 400-8510, Japan

³ Faculty of Education, Hirosaki University, Hirosaki, 039-8560, Japan

I はじめに

愛知教育大学教員養成キャリアプロジェクトによる『教師の成長に関する調査報告書』¹⁾によると、「本学教育学部カリキュラムにおけるどのような学びから影響を受けたか」に対する問いに対し、9割を超える学生が「教育実習」について肯定的回答をしており、教員養成大学の学部教育における「教育実習」が学生に与える影響の大きさがうかがわれる。学部教育における「教育実習」の目的や意義等について改めて検討することは、教師教育の今後を見直すことにつながると思われる。

「教育実習」の内容に関する検討の必要性もさることながら、「教育実習」に関わって「事前・事後指導」もまた教育職員免許法に位置づけられている。それゆえ、「教育実習」の目的と深く関与する「事前・事後指導」の指導内容や指導方法について、具体的に検討することは「教育実習」の充実や向上につながるといえる。

本稿では初めての長期間にわたる「教育実習」に向けて実施した「事前指導」の指導内容の実際をもとに、学生の変容に焦点をあて指導プログラムの成果と課題について検討し、学部教育における教師力の基盤形成につながる教育実習の事前指導に関する指導内容について検討することを目的とした。

II 研究の視点と方法

II-1 教員養成教育の中核をなす教育実習

教員養成の在り方をめぐって、養成年限の変更や教職大学院の存在等、さまざまな議論や実践が重ねられている現在、改めて学部(学科)における「教育実習」の位置づけについて問いなおが必要である。

教育実習は、教員養成教育の中核をなし、将来教職に就くことを志望する学生にとって基礎となる経験である。『よい教師をすべての教室へ』を著した Linda

Darling-Hammond と Joan Baratz-Snowden は、「教育実習は、教師の学びに多大の効果をもたらすと長く認められてきた。」²⁾と述べ、「未来の教師の実際の授業経験が、どのようなものであるべきか、それを

どのようにカリキュラムに結びつけるか、ということの熟慮に立って構成されることである。」³⁾(太文字は同書による)と授業経験に向けた教員養成教育や教育実習に向けた事前指導のカリキュラムに言及している。また、柴田義松は「人に何かを教えるためには、人間そのものについての多面的な認識が必要であるし、教える内容については学問的な基礎づけが必要である。」と述べ、「教育技術の本質は、このようにして『何のために』『何を』『どのように』教えるかという『目的-内容-手段』の関係について常に新しい関係を樹立し、新しい発見や変革を教師や子どもにも生み出すような創造的活動のなかにある。」⁴⁾として、「目的-内容-手段」の関係に着目している。



参考資料1 DVD「はじめての教育実習」



参考資料2 DVD「よくわかる教育実習」

教員養成大学においては、大学入学以降、開講科目において子どもたちをめぐる課題や授業に関する知識や技術、大学行事（例えば、本学においては「子どもまつり」等）やボランティア（同前、「サポート実習」を含む）等を通じた子どもたちと関わる経験、観察に重点をおいた短期間の基礎実習等、学生たちは教員養成大学のカリキュラムをひとつの軸として、さまざまな経験を重ね、教員としての土台を積み重ねていく。

しかしながら、前述のような経験を重ねていても、初めての長期間にわたる「教育実習」に対し学生たちが抱く不安や心配等は別格であり、多種多様な気持ちを抱えて教育実習に臨んでいる実情にある。先にあげた『よい教師をすべての教室へ』では、「うまくいく実地トレーニングの経験は、以下のような特徴を持つ。」⁵⁾と6点をあげている。

- ・目標の明解さ。発達させる技能レベルや実践レベルを導く基準の使用も含まれる
- ・より熟達した教師が彼らの思考を可視化させることによってすぐれた実践の見本を示す
- ・連続的で形成的なフィードバックとコーチングを受けられる実践の機会を多くもつ
- ・教室での活動を大学のコースに結びつける機会を多くもつ
- ・教室で教えることのすべての局面に対して段階的に責任を増やしていく
- ・改善する眼で実践を省みるための体系的な機会がある

学生たちが教育実習に対して抱く不安や心配等の由来は、上記6点と不可分にあると考えられ、教育実習に対する全体的イメージの形成と個別場면을想定した具体的な事前指導に関する指導内容がもためられる。

II-2 研究の計画と方法

本研究の目的は、初めての長期にわたる「教育実習」の事前指導について、事前指導のカリキュラムと指導内容の改善に向け実際の指導を通して課題等を明らかにし、教員養成教育における教育実習の事前指導に資する具体的提言を行うことにある。

教育実習に向けた事前指導の実施計画は、

実施時期：2016年6月～7月

実施回数：毎週1回（90分）、計8回

を基本とし、諸事情で欠席をした学生については補講を行うとともに、疑問や相談等に随時対応する体制で指導に臨んだ。なお、事前指導に関する指導プログラムの概略は、以下の通りである。

- ① オリエンテーション：教育実習に向けて
- ② 教育実習の意義、教育実習で学ぶこと(1)
- ③ 同上(2)
- ④ 学校の教育課程、授業観察
- ⑤ 学習指導案の作成(1)

- ⑥ 同上(2)
- ⑦ 模擬授業(1)
- ⑧ 同上(2)

第1回目の指導においては、大学が制作した視聴覚教材（DVD；約20分）を活用し、教育実習に対する全体的イメージの形成をはかるとともに、第2回目以降の指導内容について教育実習における個別的場면을想定した指導を予定についての示唆となる展開を意識した。

教育実習の事前指導が進行している時期は、教科教育法の科目が並行して開講されていたことから、事前指導と教科教育法の連携を意識した指導内容を構想した。そのつなぎ目として構想した第4回は、学校の教育課程や授業観察に焦点をあて、ここでも大学が制作した視聴覚教材（DVD：約20分）を活用し、教育実習における観察に対する具体的なイメージの形成を目指した。教育実習の基礎であり基本となるのは、教育実習の場であり環境となるあらゆる「人（教師・子ども・学校に係る職員・地域の人々・保護者等）と事柄（授業をはじめとするすべての教育活動）」の「観察」にあることを強調した。

初回の第1回、中間の第4回、最終回の第8回に、事前指導の内容についてのコメントを学生たちにもとめた（自由記述）。学生たちが記したコメントをもとに、事前指導に関する指導プログラムを臨機応変に修正すると同時に改善に向けた資料とした。

III 事前指導に関する指導内容の実際と課題

III-1 実施した指導内容の実際

指導内容の拠り所とした資料のひとつは、大学が作成した『教育実地研究の手引（総論編）』および『教育実地研究の手引（小学校編）』『教育実地研究の手引（中学校・高等学校編）』である。

『教育実地研究の手引（総論編）』の冒頭では、「教育実習の意義」について次の4点を目標として掲げている（太字は同書による）。

- ①学校教育の実際について、**体験的、総合的な認識**を得ること。
- ②大学において修得した教科や教職に関する専門的な知識、理解や理論、技術を児童・生徒等の成長発達に適用する**実践的能力の基礎を形成**すること。
- ③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な**研究的な態度と能力の基礎を形成**すること。
- ④教育者としての愛情と使命感を深め、**教員としての能力や適性についての自覚**を得ること。

これらを踏まえ、「教育実地研究を通して、教師を目指す上での**自分の研究課題を明確**にしていくこと」⁶⁾が上位の目的として位置づけられている（アンダーラインは筆者による）。事前指導（8回）の指導内容はこれらの目的・目標に照らし、内容と方法を構想し、実践を試みた。

参考資料3 配布資料

2016年度 教育実習事前指導

青木

資料 1-1

1. 実習に向けて：テーマを設定して、実習に臨もう

- ①実習から導きだされた課題との関係
- 卒業研究との関係
- 採用試験との関係・*？*・など

2. 教師の技術を学ぼう

- ①授業の中での子どもたちへの対応技術：授業をつくりあげる要素の実際を学ぼう
 - 子どもの発言に対する教師の発言や対応
 - 1) 子どもの発言を強く後押しするもの
 - 2) 子どもの発言を発展（深化や再考など）させるもの
 - 3) 子どもの発言を活用して授業の雰囲気や和らげるもの、など様々な面をもつ
- ②授業のねらいを確認しよう：授業の目的・内容・方法を結びつけて、授業を観察しよう
 - 授業者の教育観、目的論
 - 授業者の発問・指示・板書：授業者の授業の意図をよみとる
- ③板書技術を学ぼう
 - 1) 学習課題が、どのように位置づけられているか
 - 2) 子どもの発言を、どのように板書しているか
 - 3) 図や色チョークをどのように活用しているか
 - 4) 字の大きさはどうか（見やすいか）
 - 5) 板書する速さはどうか、どのタイミングで板書しているか
 - 6) 板書する際の教師の姿勢（位置）はどうなっているのか
 - 7) 資料はどの位置に掲示されているか、など
- ④子どもたちのノートを観察しよう
 - 1) 課題が書かれているか
 - 2) 板書の内容がまとめられているか
 - 3) 自分の考えが書かれているか
 - 4) 友だちの発言などがメモされているか
 - 5) 調べたことがまとめられているか
- ⑤授業記録を作成しよう
- ⑥一人ひとりの子どもの動き・教師の動きに着目して授業を観察し、技術を学ぼう
 - 子どもの活動、つぶやき、表情、など
 - 教師の活動、目配り・気配り、表情、など
- ⑦教師の話術に着目しよう：さまざまな表現（声の強弱、身振り手振り、表情など）

3. 気をつけたいことなど

- ・言葉づかい：先生たち、職員さんたち、子どもたち・・・
- ・小学校で学習する漢字（別紙資料参照）
- ・失敗から学ぶこと、ふりかえてみることなどを意識・分析する
- ・人権感覚をみがこう：相手の立場にたって、もしも○○○だったら・・・想像力をはたらかせる
- ・ゆとりをもって臨む：準備をしっかり、時間的なゆとりをもって臨む
- ・ときに沈黙することも：「考える」「集中する」など、思考を深める「間」としての「沈黙」
- ・子どもたちの実態を観察する
- ・健康管理をしっかりと

参考資料4 本学における教育実地研究（教育実習）の体系

V 本学における教育実習のしくみ

1. 教育実地研究（教育実習）の体系

本学では課程ごとの教育課程や、それぞれが育成をめざす教員像に応じて、下表のような教育実地研究の体系を設けている。教員養成4課程では4年間にわたりそれぞれ3種の教育実習が用意されており、大学での学修の進行に合わせて主免・副免の取得に必要な教育実習が展開されている。また、現代学芸課程の教員免許状取得希望者は、2種類の教育実習を行って単位を取得する必要がある。

	初等教育 教員養成課程	中等教育 教員養成課程	特別支援学校 教員養成課程	養護教諭 養成課程	現代学芸課程 選択 教職志願者
第1学年	基礎実習				
	9月 3日間 附属学校園 観察実習 ※特別支援学校教員養成課程のみ5日間 年間 2日間 附属特別支援学校 観察・参加実習 ※特別支援学校教員養成課程を除く 1単位（単位は事前・事後指導を含む） ※附属特別支援学校での実習は小・中学校教諭普通免許状の 授与申請に必要な『介護等体験』の一部を構成しており、 修了後に実施証明書を受領できる。				
第2学年	介護等体験				
	愛知県内の社会福祉施設ならびに特別支援学校 合計7日間 実施証明書の受領 『介護等体験』は大学が単位認定するものではなく、正確には教育実習に位置づくものではない。しかし、後のページに解説する効果が期待されていることから、教員免許状取得に際して法律により履修が義務づけられている。そこで、本学では教育実地研究（教育実習）を展開する上で不可欠な体験として位置づけている。				
第3学年	主免実習	主免実習	基礎免実習	養護実習	介護等体験
	小学校・幼稚園 10月3週間5単位 ※幼稚園のみ4週間 (単位は事前・事後指導含む) 必修	中学校・附属高校 10月3週間5単位 (単位は事前・事後指導含む) 必修	小学校 10月3週間5単位 (単位は事前・事後指導含む) 必修	小学校 10月4週間5単位 (単位は事前・事後指導含む) 必修	導入実習 附属中学校・高校 9月1週間(中免) 1日間(高免のみ)
第4学年	隣接校種実	隣接校種実	特別支援教育実習	副免実習	教育実習
	中学校・小学校 6月2週間2単位 (単位は実習のみ) 選択	小学校・附属高校 ※情報のみ中学校・附高 6月2週間2単位 (単位は実習のみ) 選択	特別支援学校 6月3週間3単位 (単位は事前・事後指導含む) 必修	中学校 6月3週間5単位 (単位は事前・事後指導含む) 選択	中学校・高等学校 6月3週間(中免) 2週間(高免のみ) 5単位(中免) 3単位(高免のみ) (単位は事前・事後指導含む)
<「教職実践演習」での振り返り>					<教職実践演習>

※ 表中に示された期間には、事前・事後指導の時間は含まれない。また、教育実習の種別や取得する単位数によって、必要となる最低勤務日数が異なるので注意すること。

※ 現代学芸課程では第3学年の『導入実習』と第4学年の『教育実習』を合わせて成績判定し、単位が認定される。

表1 事前指導（全8回：各回90分で実施）

回	指導内容	教材、資料プリント
1	学校と教育課程、教科とは何か？ （「教育基本法」「学校教育法」「学校教育法施行規則」 および「学習指導要領総論編」「前同家庭科編」等をもとに、学校に おける教育活動が何を根拠としているのかを説明し、「教科」として の「家庭科」がどのように位置づいているのかを改めて確認）	DVD（「はじめての教育実習」） 愛知教育大学制作（22分） （参考資料1参照） 学習指導要領総論編・家庭科編
2	教育実習とは？ 教育実習生の1日 教育実地研究の方法（「観察」「参加」「実習」）	「教育実地研究の手引き（総論編）」
3	社会人としての教育実習における心得 はじめて出会う教職員と子どもたちに向けた挨拶を考える（演習：ワ ークシートに記入後、全員の前で、実際の場面を想定した挨拶のプレ ゼンテーション）	「教育実習に備えて」（あいさつを考えるワ ークシート）
4	「観察」とは何か？ 教育実習の目的を各自で設定しよう 「教師の技術」を学ぶ	DVD（「よくわかる教育実習～授業観察編 ～」愛知教育大学制作（18分） （参考資料2参照） ・学習指導要領小学校国語編記載の小学校 で学習する漢字一覧表プリント ・板書と漢字の書き方に関する文献を基に 作成したプリント ・「教育実習に臨むにあたって」 レジュメ（参考資料3・4参照）
5	学習指導案とは何か？ 学習指導案の作成（演習）	「立案しよう！家庭科教育指導案」
6	学習指導案の作成（演習）	学習指導案の様式例の資料プリント
7	学習指導案の作成（演習）	同上
8	作成した学習指導案を検討（グループワーク） 教育実習を体験した4年生からのメッセージ（2人）	書画カメラ

Ⅲ-2 学生のコメントからみえる変容

事前指導に対する学生からのコメントを「第1回」「第4回」「第8回」に書かせ、学生の変容を把握するとともに、次年度以降に実施する事前指導の改善に向けた資料とした。以下に、学生の変容を示すコメントをいくつか挙げる（参考資料5参照）。

注：*黒文字（1回目）、青文字（4回目）、赤文字（8回目）

・うまく授業をすることができるかどうか。
 ・子どもたちと仲良くなれるかどうか。
 ・3週間のりきることができるかどうか。
 ・家庭科以外の教科の指導案作成や授業をすることができるかどうか。
 ・授業準備などで時間をうまく使えて効率よく取り組めるかどうか。
 最初に比べたら不安は少なくなりました。やはり指導案など提出するものの書き方や効率よくできるかが心配です。しっかり準備していきたいです。緊張してふるえないか心配です。でも、実習が楽しみになってきました。
 8回の講義を受けて、実習が楽しみになってきました。まだまだ不安なことはあるけれど、貴重な経験ができるので、しっかり学んでいきたいと思えます。指導案作りは、少し自信がついてきました。 ①

観察・参加・実習という3つのキホンの実習の流れを意識し、教育実習に向けての意識を高めていきたいです。指導案の作成が一番不安なので、実習前にもどのようにして作成していけば良いか学んでいきたいです。
 家庭科は他の教科との結びつきも強く、生活に関わることを全般を学ぶ教科だと改めて実感しました。友だちとも意見交換をし合って、少しでも不安を取り除きたいです。
 教育実習に向けての本格的な準備はまだ進めていないので、まだ少し実感がなくても、実際に指導案を作成してみて、とても時間がかかったし、実習までにやるべき事はたくさんあると感じることができました。友達の考えた指導案も参考にして、書き慣れていきたいと思えます。がんばります!! ②

まだ、いまだに自分が授業している姿が思い浮かばず、もう何が不安なのかも分からないことが不安です（笑）。
 いつも一緒に授業をうけている子の前ですら、少し声がふるえてしまったので、当日が不安になってきました（笑）。上手くいく気があんまりしないというか、いまだにもうあとちょっとで実習というイメージがわかりません。
 毎週わけてやることでより分かりやすく、身になってよかった！生徒の言動などは指導案を書く上でまだやってみないと分からないけれど、臨機応変にできたらいいなと思った！ ③

子どもと関わる際、「遊ぶ」ということで楽しく関わりますが、「先生」としての気持ちを忘れずに、となると人見知りも出てしまい、なかなか喋ることができないかもしれない、と思いました。研究授業とはいえ、先生として教える必要があるため、とても緊張して不安です。授業も挨拶も含め、子どもの反応には不安を感じます。子どもが興味を持つ内容、納得できる授業のために、どう自分が提示していくか、具体的に考える必要があるとおもいました。
 教育実習に行く際の大切なこと、授業の鍵となるものを得ることができ、少し肩の荷が軽くなったように思います。頑張りたいと思えます。ありがとうございました。 ④

参考資料5 ①～④ 学生のコメント（一例）

学生が記したコメントから、学生が教育実習に抱く不安は大きく二つに大別できる。ひとつは、「対人関係」であり、もうひとつは「授業」として集約できる。

本学において教育実習(主免実習)は卒業要件であり、1年次「基礎実習」、2年次「介護等体験」がカリキュラムに位置づけられている。「基礎実習」は「観察」に主眼がおかれ、直接に児童・生徒とふれあう機会は殆どない。また授業等の教育活動に直接的な関与がなく、教育現場の教師から指導を受ける機会も殆どない現状にある。ここで学生個々のコメントに基づく分析について簡略であるが、以下に述べる（参考資料5参照）。

教育実習を控え、学生③が記している「何が不安なのかも分からないことが不安」(1回目)というように、授業をはじめ、教育実習の全体像が把握できていない学生が少なからず存在している。事前指導プログラムでは「対人関係」と「授業」に焦点をあて、指導内容を構想した。事前指導プログラムの柱のひとつである「対人関係」は、第3回で「社会人としての教育実習における心得」について解説をし、「はじめて出会う教職員と子どもたちに向けた挨拶を考える」ことを演習形式で実施した。教職員と子どもたちを対象とした実際の場面を想定した挨拶について、ワークシートに記入し、全員の前で挨拶のプレゼンテーションを行い、相互交流した。緊張から声が小さかったり震えたりなど、教育実習に臨む仲間のさまざまな姿や様子から、自分自身だけが不安に感じているのではないことを知り、回を重ねるほどに励まし学びあいながら、「友だちとも意見交換し合って、少しでも不安を取り除きたい」(学生②・4回目)と前向きに不安と向き合おうとする変容を確認することができた。それは学生④においても、「とても緊張して不安」(1回目)が、「少し肩の荷が軽くなった」(8回目)と記しているように、具体的な場面を想定した演習とその成果についての相互交流を行うことで、教育実習に対する不安は、教育実習に対する期待や意気込みに変容していることが確認できる。

事前指導プログラムのもうひとつの柱である「授業」については、第4回で参考資料2に示すDVDを用い、授業観察の実際場面を視聴させ、授業に対する全体的なイメージ形成を目指した。そのうえで、授業づくりの出発点ともいうべき学習指導案作成に3回の演習、およびグループワークにより作成した学習指導案の検討を第8回に行った。学生②が「指導案の作成が一番

不安」(1回目)と記しているように、学習指導案作成と授業実習を不安に感じている学生が大半である。3回の演習において、学習指導案で取り上げる教材研究を事前指導担当者や教育実習に臨む仲間と意見交流を重ねながら教材研究の意義について理解を深めた。また、学習指導案作成の基本的な技術が習得されていく過程で「実習が楽しみに」と学生①が記しているように、不安の減少や解消する学生の変容を確認できた。

初めての長期(3週間)にわたる教育実習は、教員養成大学の学生にとって職業選択とキャリア形成の入口と土台となる公的インターンシップといえる。それゆえ、職業選択やキャリア形成の観点から、初めて公的に社会に触れ体験する教育実習の場を組織である「対人関係」(子ども、教師、学校内の職員、地域の人々等)や学校の教育活動の中核を担う「授業」に対し不安を抱くのは当然といえる。

事前指導におけるDVD等による教育実習に対する具体的イメージ形成や教育実習の実際場面の模擬体験等の積み重ねが功を奏し、指導がすすむ程に教育実習に向けて積極的に臨もうとする学生の姿を確認できた。

Ⅲ-3 指導内容の改善に向けた課題

前節で述べたように、学生たちの教育実習に対する多種多様な不安や心配等は指導の回を重ねる毎に解消されたことが確認できた。一方で、学習指導案の作成に関する指導については、改善の必要が示唆された。この点は、学部教育において、教師の「専門職性」や「専門性」をどのように捉え、どのような基盤づくりを探究するかという課題といえる。

今津孝次郎は、教師の「専門職性」「専門性」について、次のように言及している。今津によると、『専門職性 professionalism』は『教職が職業としてどれだけ専門職としての地位を獲得しているのか』という点を問題にする教師の職業的『地位』に関わる概念であるのに対し、『専門性 professionalism』は、『教師が生徒に対して教育行為を行う場合に、どれだけの専門的知識・技術を用いるか』という点を問題にする教師の『役割』ないし『実践』に関わる概念」と述べている⁷⁾。これは昨今の問題とされる「教師力」育成の上で、指標となる概念といえる。

「教師力」の基盤形成に向けて、学部教育において、さしあたり次の2点について検討する必要があると思われる。ひとつは、職業としての教師が社会的・歴史的にどのような役割が期待されているのかを自らのキャリア形成と重ね合わせながら意識を高め磨いていく科目や教育実習等に係るプログラムの改善と充実をすすめること、もうひとつは、「授業」をはじめとする教育活動における教育内容に関する専門的知識・技術について認識を広げ深めるような科目や教育実習に係るプログラムの改善と充実をすすめることである。学部教育において「専門職性」と「専門性」を自覚し、「専門職性」と「専門性」を架橋する総合的・実践的な「教師力」の基盤形成となる教師教育プログラムの開発がのぞまれる。

Ⅳ おわりに

平成28年度の「教育実習(主免実習)」を終えた現在、教育実習期間に実施された研究授業の学習指導案が大学に返却され、教育実習のひとつの到達点である学習指導案について、総括する作業をすすめている。教職を志す学生にとって、はじめての教育実習の学習指導案は、専門職としての教職をあゆみだす第一歩を記す足跡といえる。教育実習の事前指導において確認できた学生の変容と教育実習の研究授業の学習指導案(および、学習指導案に関する学生のコメント)を重ねて追跡と分析をすすめるのが当面の課題である。

なお、本学では、大学HPに、学生向けの「学習指導案データベース」が掲載されており、必要に応じて何時でもweb上で閲覧可能な環境にある。データベースは蓄積をみせており、教育実習の事前指導や教育実習中の利用にかぎらず、学部教育のカリキュラムのなかにおいても有効な活用の在り方の模索も課題である。

また、教育実習生がお世話になる実習校との連携をはじめ、愛知県の教育センターや教育委員会、地域社会との連携など、教育実習をめぐるよりよい在り方の追究と改善を目指して、実践を重ねていきたい。

付記

本研究は、2016～2018年度文部科学省科学研究費(課題番号16K00738「家庭科教員の教師力向上のためのキャリア形成プログラムの提案」)の助成を受けて進められたもので、ご支援に感謝いたします。また、本研究の一部については、日本教育大学協会全国教育実習研究部門第30回研究協議会において口頭発表を行った。研究発表に関わって、「平成28年度愛知教育大学大学教育研究重点配分経費」の助成を受け、活発な質疑と討論の機会を得ることができたことに対し、重ねて感謝いたします。

引用文献

- 1)愛知教育大学教員養成キャリアプロジェクト『教師の成長に関する調査報告書』愛知教育大学、2014年、16頁
- 2)L・ダーリング・ハモンド&J・バラッツ・スノーデン編 秋田喜代美・藤田慶子『よい教師をすべての教室へ 専門職としての教師に必須の知識とその習得』新曜社、2009年、62頁
- 3)同上、65-66頁
- 4)柴田義松・木内剛編『教育実習ハンドブック(増補版)』学文社、2012年、4頁
- 5)前掲2)、64頁
- 6)愛知教育大学編『教育実地研究の手引(総論編)』愛知教育大学、2016年(改訂)
- 7)今津孝次郎『変動社会の教師教育』名古屋大学出版会、1996年、43頁